



『古事記』仲哀天皇段の「名易え」説話

前川 治



『古事記』 仲哀天皇段の「名易え」説話

1 はじめに

『古事記』中巻に記されている仲哀天皇の段には、第15代天皇である応神天皇の出生から即位までの物語が語られ、神秘性に満ちた内容になっている。その中に、即位前の応神が角鹿（つぬが）（現在の敦賀市域）で伊奢沙和気（いざさわけ）大神と「名易え」をした、という説話がある。この「名易え」説話に関して、これまでにいくつかの研究が試みられているが、難解な内容であるため未だに明確な結論は出ていない。

『古事記』の記述によると、神功皇后は新羅遠征の後、筑紫にて太子（後の応神天皇）を生み、倭に帰る途中、反逆した忍熊王と戦い、これを攻め亡ぼした。その後、大臣の建内宿禰は太子を連れて、禊のために近江と若狭国を巡歴し、越前国の角鹿に仮宮を造り、そこに滞在した。その夜、伊奢沙和気（いざさわけ）大神が宿禰の夢の中に現われ、「わが名を御子（太子）の名に易えてほしい」と告げた¹）。宿禰は祝福してこれを受け入れたので、大神は、「明日の朝、浜にお出かけなさい。名を易えたしるしの贈物を差し上げましょう」と重ねて告げた。翌朝、太子が浜に出てみると、鼻に傷のついた入鹿魚（いるか）が、浦いっぱい寄り集まっていた。太子は、「神が私に食料の魚を下さったのだ」と言った。それで、伊奢沙和気大神はその御名を称えられて御食津（みけつ）大神と呼ばれるようになった。この御食津大神は、今は「気比大神」といわれている。また、傷ついた入鹿魚の血が臭かったため、入鹿魚が寄り集まっていた浦を血浦というが、今は角鹿と呼んでいる。以上が「名易え」説話の概要である。ここでは「名易え」後の太子の名については不明である。

『日本書紀』でこの話に相当する記事は、神功皇后摂政 13年の2月8日条に見られる。そこでは神功皇后が武内宿禰に太子の角鹿・筥飯大神参拝の随伴を命じた、とある。

また、『書紀』の応神天皇即位前紀の割注に次のような記事がある。応神天皇が皇太子であったとき、越国に行って角鹿の筥飯大神にお参りになったが、そのとき大神と太子とが名を相易えた。それによって、大神は去来紗別（いざさわけ）神といい、太子を誉田別（ほむだわけ）尊と名付けたという。それだと大神の名は誉田別神、太子の元の名は去来紗別尊ということになる。しかし、この事に関して『書紀』では、「けれどもそういった事実はどこにも見られず、いまだつまびらかでない」と述べている。この事は「名易え」説話を難解にしている原因の一つになっている。

両者を比較してみると、『古事記』における太子の角鹿滞在は、忍熊王との戦いで付いた汚れを禊で落とすため近江、若狭を巡歴した時の話となっている。一方『書紀』には角鹿への旅が禊であるという記述はない。『書紀』における角鹿参拝は、神功皇后の新羅遠征の成功と太子の皇位継承の決定を神に報告する事が目的であった可能性がある。

この様に、『古事記』と『日本書紀』を比較してみると、「名易え」説話を最も難解にしている要因は、「名易え」後の太子（応神天皇）の名が不明である点にある。ホムダワケという太子の名が

「名易え」後イザサワケに変わっていれば明確なのだが、そうっていない所に「名易え」説話の難解性がある。

そこで、

- ① 太子と氣比大神との「名易え」は、どういう意味であるか。
- ② 『古事記』における一連の応神関係の説話の中で、「名易え」はどう位置付けられているか。
- ③ なぜ角鹿で「名易え」が行なわれたのか。

以上の三つの問題を提起する事にする。

本研究は3点の問題を中心に、これまでの主要な研究を整理した上で、今までほとんど注目されていなかった民俗学や文化人類学の視点も取り入れて、「名易え」説話の成立背景を考えていく事にする。

2 「名易え」説話に関する諸研究

本章では、これまでに出された諸研究を整理して、「名易え」説話の成立背景にある課題を探っていくことにする。

本居宣長は『古事記伝』の中で、「名易え」は太子（後の応神天皇）の名を氣比大神に差し上げるという意味であり、『書紀』の記述は誤っていると述べた²⁾。

竹野長次氏は、『古事記』の「名易え」説話について、太子が神の名を得る事、すなわち神の靈威を身につける事により、太子の靈威が高まったと考え、「名易え」の意味を、氣比大神の名を太子に差し上げて太子の名にする、と解した。そして、「名易え」が角鹿で行なわれた理由は、敦賀地方の土地神が神名を奉った事で、敦賀地方の豪族が王朝へ帰順した事を表現しているものと考えた³⁾。

吉井巖氏は、『古事記』の説話の中に「名易え」の結果を示す記述がなく、最後は魚を賜う話になっている事について、説話中の「ナ」は魚と名のどちらにも読める事から、この話の原型は、太子が魚を賜った話であり、これが名を賜った話に利用されたためであるとした⁴⁾。また吉井氏は、太子が角鹿で「名易え」をした理由については、継体天皇が応神天皇の子孫と称して越前から大和へ進出した事実から考えた。『日本書紀』によると、継体天皇の本拠地は、若狭、越前にあった。そこで同氏は、角鹿はその中心に位置しているため、角鹿地方の漁撈民の間で信仰されていた地方神の伝承が、継体天皇の始祖伝説に取り入れられたので、太子は角鹿で「名易え」をしたのだと考えた⁵⁾。

三品彰英氏は、「名易え」に関して、太子の元の名は「ミケツ」あるいは「ケヒ」であり、氣比大神

「イザサワケ」であると考え、この両者の交換であると解した。また、三品氏は太子の「名易え」の性格について、典型的な成人式の儀礼であり、神との交霊による新しい人格の成立及び新天皇の出現であると考えた。角鹿で「名易え」が行われた理由として、イザサワケノ大神が、太子の母である神功皇后の祖先神である事から、祖先神との関係を指摘した⁶⁾。

塚口義信氏は、民俗の事例から、「名易え」は、成年式における改名儀礼の神話的表現であると見なした。角鹿で「名易え」が行なわれた理由として、応神の母系である近江の豪族、息長氏との関係を指摘した。妻問婚の時代であれば、子は母方で養育され、成年式も母系の神社で行なわれたのは自然であろうと考えたのである⁷⁾。

倉塚暉子氏は、「名易え」の後の太子の名前は不明確であり、『応神紀』の割注の記述も、『日本書紀』の編者にすら意味がよく分からなかった事を示しているので、「名易え」の持つ本来の意味はよく分からない、と述べている。倉塚氏は、説話中での「名易え」の位置付けについて、太子の再誕であると考えた。同氏は、成年式において、「名易え」は大人として再誕するために必要な儀礼的手続きであるので、『仲哀記』中の応神天皇の物語は、再生復活儀礼に梓どられた新たな王の誕生の物語であると述べている。さらに同氏は、角鹿で「名易え」をした理由について、大陸交通の裏玄関に位置している角鹿を、大陸交通の表玄関・筑紫で誕生した新時代の初代王応神が、第二の誕生をとげた場所にするためであったと考えた⁸⁾。

阪下圭八氏は、『古事記』本文を口誦面でとらえ、ナは「魚」のナと「名」のナのどちらにもとれる事から、夢の中の神のお告げは一つの謎かけであったと考え、「名易え」は、気比大神の魚と太子の名前との交換と見なした。また、角鹿での神託は、成年式の試練であり、後に続く母後の歡喜の歌は、一人立ちした太子を祝うものである事から、「名易え」説話は応神の第二の誕生譚であったと考えた。角鹿での「名易え」の理由に関して、角鹿は、宮廷の食料が献上される場所であり、同時に、大陸交通における重要な場所であったため、その守り神である気比大神を、海の彼方の金銀の国を神授された太子に結び付けるためであったと述べている⁹⁾。

尾崎和光氏は、文中のタケノウチノスクネの言葉に注目し、太子の名を易えたのでなければ不自然であるとして、「名易え」は、気比大神が太子に名を与えたという意味であると考えた。そして、この「名易え」説話の部分は、独立した説話的性格を持ち、太子が土地の霊を身につけて支配者の資格を得る話であったと考えた。太子が角鹿で「名易え」を行なった理由として、角鹿は神功・応神にとって古い縁のある重要な場所であり、その土地に関係の深い、古い伝承が伝えられていたからであろうと推察した¹⁰⁾。

田村克巳氏は、三品氏の説を受け、「名易え」は太子にとっての成人式であると解した。角鹿

で「名易え」を行なった理由は、神功・応神説話の構造から推定して、角鹿は王朝にとって新たな王の出現する場所であったからだと考えた¹¹⁾。

以上、「名易え」説話に関しての主要な研究とその成果をまとめてみると、「名易え」は、太子の成人儀礼として位置付けられるという事で見解が共通しており、「名易え」が角鹿で行なわれた理由として、神功・応神の先祖との関わりがみられる事などをあげる事ができる。しかし、なぜ「名易え」を行なったのかについては、太子自身の改名、太子の名と気比大神の名の交換、あるいは気比大神の魚と太子の名の交換などといった諸説がある。その原因は、「名易え」の後の太子の名と気比大神の名について不明である事にある。

3 名前に関する民俗事例と太子の名に関する諸問題

前章で述べた通り、「名易え」は太子の成人儀礼に位置付けられる事と、「名易え」が角鹿で行なわれた理由に、神功・応神の先祖とされるアメノヒボコ等の朝鮮半島系渡来者集団との関わりがみられる事については共通した諸説になっている。しかし、なぜ「名易え」を行なったのかについては諸説が分かれている。その原因として、「名易え」の後の、太子の名と気比大神の名について不明である点がある。ここでは、名前に関する民俗事例を五例あげ、前章のこの問題点について考察していく事にする。

【事例1】中国や日本における一般的な例

中国や日本の人名には、諱（いみな）、字（あざな）というものがあつた。諱は、生まれたとき授けられた実名であり、人格自体と同一視され、非常に重要視された。これは神意によって決められ、他人にこれを知られれば、自分が他人の自由になる恐れがあるとされていた。一方、字は、男子が元服のときにつける名で、通常は諱と何らかの関係のある文字から選ばれた。その人の親、君主、師等、それ以外の者は、その人の字で呼んだ¹²⁾。

【事例2】中国雲南省碧江県のヌ一族の事例

中国雲南省碧江県の少数民族であるヌ一族の男子は、一生のうちで幼名、成人名、結婚名の三つの名前を持つ。成人名は14、5歳になった時与えられ、同世代の人達だけが使用する呼称である。そのため、この成人名は、尊敬の対象である家族や尊属（親族）の前では使用しない¹³⁾。

【事例3】シベリアのエベンキ人の事例

シベリアに居住するエベンキ人の中では、名前を敵や悪霊に知られた者は、敵や悪霊から害を加えられると考えられていた。そのため、生まれたときには聞こえのよくない名や、侮辱的な名がつけられ、6歳頃から改名を行なった。また、年長者の名前を呼ぶ事は無礼にあたり、その場合は、年齢または姻戚関係に応じた呼び方で呼んだ。異民族の人間と共にいる時は、名前に対する悪巧みを恐れて、自分の名前を言わずに、幼名あるいはあだ名を名乗った¹⁴⁾。

【事例4】古代インドのバラモンの事例

古代インドのバラモンが持つ名には密名と通名との二種類がある。密名は誕生直後につけられ、本人と父母、師以外は知らず、儀式の場合以外は使われない。通名は密名以後につけられ、日常では通名を使う。また帝王や高僧、学者などには美称があり、互いに呼び合う際には常にこれを用いた¹⁵⁾。

【事例5】古代エジプトの事例

古代エジプトの人名には「真の名」（大きい名）と「良い名」（小さい名）の二種類の称号がある。「真の名」（大きい名）は厳秘のものとされ、「良い名」（小さい名）だけが公にされていた¹⁶⁾。

こうした事例からみると、人名が禁忌となっている場合が多い。日本に人名を禁忌とする習俗が存在していたことについて、法学者の穂積陳重氏は『実名敬避俗研究』の中で次のように述べている。本居宣長の『古事記伝』以来、日本には人名に対する禁忌の習慣がなかった、という説が主であったが、穂積氏は上代古典を民俗学的事例を用いて比較・分析することにより、日本にも人名を禁忌とする習俗が古来から存在していたことを論じた。それ以後、国内での名前に関する習俗の研究が行なわれ、日本にも人名を禁忌とする習慣があった事が明らかにされつつある¹⁷⁾。また、穂積氏は記紀に伝わる神名や天皇名の多くがその性格や居住地、縁のある土地にもとづいた美称や尊号であると述べた。その上で、同氏は『古事記』中の太子（後の応神天皇）の名である品陀和気命、あるいは『日本書紀』中の誉田別命という名称は、河内国志紀郡の地名に基づく尊称であると考えた¹⁸⁾。

『古事記』中にみられる太子の名である大鞆和気命については、豊田国夫氏は、『名前の禁忌習俗』で、弓を射る時に腕に付ける鞆のような肉が腕にあった事に由来し、出生時の伝説的なものによる美称であると考えている。本居宣長の『古事記伝』から西宮一民氏の研究に至るまで、気比大神の神名について、気比の気は食物、比は靈魂の意味であるといわれ、食物神に対する尊号であると考えられている¹⁹⁾。御食津大神もまた同様に、食物神に対する尊号であるとされている。西宮氏によると、伊奢沙和気大神の伊奢は、「誘う」の「いざ」、沙は神稻の事であり、それに男子の敬称「和気」を付けたものであるとされている。²⁰⁾ よって伊奢沙和気大神の名も尊号であると考えてもよからう。この他、

『垂仁紀』3年条には、アメノヒボコが淡路島の出浅邑（いでさむら）を賜ったという記事がある。今井啓一氏以来、氣比大神（伊奢沙和氣大神）をアメノヒボコとみる説がある²¹⁾。この説に従うならば、出浅邑との関係からみて、伊奢沙には地名に基づく尊称の意味も含まれている可能性もある。こうしてみると、『記紀』に記されている太子の名及び氣比大神の名は尊号であり、実名ではないと考えられる。

太子の名が禁忌とされていたならば、「名易え」の後の太子の名が、『古事記』に記されていない理由はある程度推察できるであろう。

豊田国夫氏は、上代では、子を決める権利は母親が持っていたと推測し、次のような事例をあげている。『日本書紀』神代下の一書には、ヒコホホデミノミコトがトヨタマヒメに子どもの名を何とつけば良いかと聞いている条がある。『古事記』の垂仁天皇の段には、子の名は、必ず母親が名づけるものであるが、この子の名をどう名付けようか、という事が記されている。さらに、『万葉集』には、

たらちねの母が召ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか （三一〇二）

という歌があり、この「母が召ぶ名」とは実名であったといえる²²⁾。一方、世界各地の未開民族や古代社会における成年式の中には、死と再生の概念及び先祖神との関わりが見られる。一度死んだ人間の魂が改名によって高級な魂として再生し、同時に先祖の霊力が子孫に伝えられると信じられてきた²³⁾。この点を考慮して、今井氏の言うように、神功皇后の先祖神アメノヒボコが氣比大神だとすれば、太子は、始めは母后によって命名され、成年式の場で、太子は、氣比大神の信託によって母系の祖先神が持つ秘密の名を継承する事を承認されたであろうと推測できる。以上をまとめて、「名易え」後の太子の名が『古事記』に記されていない理由は、太子の名が禁忌とされたからであろう。『記紀』に記されている太子の名、及び氣比大神の名は尊号であり、実名ではない事から来ているのだと考えられる。そして、今井氏以来の氣比大神＝アメノヒボコ説にもとづき、民俗事例における成年式のあり方と、上代では母親が子どもの名を決めていたらしい事を合わせ考えたならば、「名易え」とは母親によって命名された太子が、母方の祖先神が持つ秘密の名を継承した事であると推定できる。なぜ「名易え」説話が行なわれたかについて、吉井氏や阪下氏がいうように「吾が名」を「吾が魚」呼んだというのでは、話がまとまらなくなってしまう、一層混乱する事になってしまう。竹野氏、塚口氏、尾崎氏の見解からみて、太子と氣比大神との「名易え」は、太子が氣比大神の名を与えられたとみるのが適切であろうと考えられる。

4 「名易え」説話にみる贈与と交換

前章でみてきた通り、太子と気比大神との「名易え」説話の中心は、太子が神の名を授けられる事で、神の靈威を身につけ、魂を強化する事であった。『仲哀記』後半の構成は、太子の死と再生を象徴し、「名易え」は、太子の成人としての第二の誕生に位置しているといえる。そして、『記紀』における角鹿は、神功皇后との関係から、応神の祖先の地であったと考えられる。

ところが、ここで一つの問題が浮かび上がってくる。「名易え」説話は、太子が神の名を得たという事だけで終わってもよいはずである。だが、「名易え」の行なわれた後、気比大神は太子に食料の魚を贈ったので、「御食津大神」と呼ばれるようになったと記されている。この事が「名易え」説話の内容を不明確にさせる要因となっている。そこで、この問題を考えるにあたって、贈与交換と呼ばれる習俗が参考になるであろうと考えられる。気比大神はタケノウチノスクネに太子の「名易え」を申し出、認められた。そのため気比大神は太子に御礼の品を贈ったので、御食津大神として讃えられた。この事は、贈与交換が通過儀礼の際に行なわれた事を予測させる。これは、「名易え」説話の原型を考えるにあたって、非常に重要な意味を持っていると思われる。文化人類学における贈与交換論は、B・マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』とM・モースの「贈与論」以来、多くの研究がなされ、その方法論も多岐にわたっているが、ここでは通過儀礼や祝祭、病気、災厄等の際に行なわれる贈与交換に関して、民族誌の中からいくつかの現象を取り上げ、「名易え」説話との比較検討を試みていく事にする。ただ、古代日本における贈与交換の事例がきわめて少ない事からこの章では古代日本を考える上で参考となる近隣諸国の事例を用いて、「名易え」説話に対する検討を試みしてみる事にする。

オセアニアでの贈与交換

まず、南太平洋のオセアニアで行なわれている贈与交換から二つの事例を取り上げる事にする。

【事例1】 ポロパ族の豚祭り

パプア・ニューギニアのポロパ族が行なう豚祭りの場合、貴重な栄養源である豚肉の他に、貝や石斧が競合的交換の財として用いられる。主催者側は、豚を屠殺して祝宴の準備をし、招待客から受け取った贈りもの以上の財貨や豚肉を返す。この豚祭りは、次回、被招待者側の村落で行なわれる²⁴⁾。

【事例2】 バヌアツ・ラガ島北部のボロロリ

バヌアツ北部には位階階梯制が広くみられる。ラガ島北部の社会には、タリ、モリ、リヴシ、フィラという四つの階梯があり、最上階梯のフィラになった者がラタヒギと呼ばれる伝統的リーダーとなる。かつての北部ラガでは、階梯間の格差が現在より明確であったため、権力と名声はラタヒギに集中していた。各

階段に入ると、例えば、フィラ階段ならフィラ・ララウといったように階段にちなんだ名前をもらえる。これらはある意味では称号であるといえる。豚を殺す事は、ロロンゴと呼ばれる超自然的な力と関係しており、豚を多く殺すほどその力が増すとされている。そしてラタヒギになった者は、新たなレガリアと名前を設定でき、下位の者はその獲得を目指す²⁵⁾。これらの事例から、オセアニアにおける贈与交換には、共通して社会的な地位や威信を獲得しようとする意向がみられ、競合性をおびている。

北西アメリカでの贈与交換

アメリカ北西部の西海岸に居住するインディアンにみられる贈与交換は、この競合性がより強調されている。この中でも特にカナダ・ブリティッシュコロンビア州のクワキウトル族とアラスカ東南部のトリンギット族が行なっている「ポトラッチ」はよく知られている。以下この二つの事例を紹介してみることにする。

【事例3】 クワキウトル族のポトラッチ

クワキウトル族の社会生活の中で特色があるのは、誕生、成年期、猟で最初に獲物を捕えた時、肩書きを得た時、結婚、死亡等のような重要な機会に行なわれる派手な祭りや儀式であった。各個人は、各地域の首長との関係にしたがって身分が決まっていたが、首長は富と名声の大きさによってそれぞれ階級が決められていた。そして、この首長の階級はポトラッチによって上げられたり上げられなかったりした²⁶⁾。クワキウトル人は、夏の流動的な生活、冬の定住生活という二つの生活パターンを持ち、冬の定住期にポトラッチが行なわれる。クワキウトル族のポトラッチは、結婚式や、葬式等の通過儀礼、戦争、災厄等の機会に行なわれていた。その際、主催者の首長は、客を招待して祝宴を開き、富や気前のよさを誇示して、相手が返済できないほどの食料や毛布、カヌーを贈り、威信の獲得につとめたといわれている²⁷⁾。人生の中で初めてのポトラッチは、男子が10才から12歳くらいの時に行なわれる。男子は生まれた時に第1の名、1歳くらいになると第2の名、10～12歳の間に第3の名をもらい、社会の成員となる。この時、第3の名を得る者は、クワキウトルの通貨というべき毛布を彼の仲間に与えねばならない。これがそのポトラッチであり、その後も彼は、自分の地位を上げるために、獲得した富をポトラッチにおいて贈与していく²⁸⁾。

【事例4】 トリンギット族のポトラッチ

トリンギット族は、アラスカ東南部の島々や帯状の海辺に大きな村を造って定住し、猟、わな猟、漁撈によって生活している。トリンギットの社会全体は、二つに区分され、それぞれの集団を「半族」という。

さらに、「半族」は共通の祖先を持つ多くの氏族に区分され、同じ村に住む氏族の仲間は、強力な「リニージ」（単系出自集団）を形成し、漁場、猟場の管理、紛争の解決、儀礼の執行等の諸活動がリニージ単位で行なわれる。リニージの長は、共通の祖先との関わりが最も強いので、最も格式の高い家族から選ばれる。また、リニージの力関係によって、長同士の間にも明確な序列がある。このため、高い地位には名誉ある名と紋章、歌や踊りが先祖代々同じ数だけ決められており、安易に変更できない。地位の継承などにより、変更が生じた場合は、正当な立会人を招いて、当の地位にふさわしい儀礼を行なう必要がある。そのための儀礼の制度として、ポトラッチが定められている²⁹⁾。それは死者祭祀を中心とした慣行ともいわれ、主催者と招待客の間で、威信を獲得するために、象徴的価値の高い銅貨や毛布などのやりとりが行なわれていた³⁰⁾。ポトラッチは、第1に祝宴、第2に歌や踊り、第3に贈り物の儀礼的な交換からなり、その独特の儀式を行なうために何年も前から準備を整えた。他村から客を招いて、通常、4日間の祝宴をはるためには、十分な食料の貯蔵が必要だった。客が予期した以上に豪華な贈り物をするには、長期にわたる準備をしなければならなかった。リニージの長が型通りのポトラッチの開催を決めると、最初に親族集団の内部の同意を取りつける。次に、他村に住む同氏族の成員に協力を要請して、最後に、村の公的な行事として、村人全員に、儀礼を行なう事の上承をえなければならない。かなりの有力者でも、一生の間に7回ポトラッチを主催できれば上出来であったといわれている³¹⁾。

以上、オセアニアとアメリカ北西部の先住民族の間で行なわれている贈与交換の事例を紹介してみた。ポロパ族の豚祭りでは、主催者は招待客から受け取った贈り物以上の貝や石斧、豚肉を返す事になっている。バヌアツ・ラガ島北部のボロロリでは、個人が貴重な豚を払って、レガリアを購入する事で上位の階梯に上がり、階梯にちなんだ名前をもらう。クワキツル族のポトラッチでは、主催者は威信を獲得するために、祝宴の中で招待客に対し、返済できない程の食料や毛布、カヌーを贈った。また、男子が10～12歳になった時に行なわれるポトラッチでは、仲間にクワキツル族の通貨というべき毛布を贈って名前をもらい、社会の成員になる。トリンギット族のポトラッチでは、主催者と招待客の間で威信を獲得するため、象徴的価値の高い銅貨や毛布等のやりとりを行なっていた。

これらをまとめると、オセアニアやアメリカ北西部の諸民族で行なわれている贈与交換には、相手よりも多くの贈り物をする事によって、地位や威信、名誉を獲得しようとする行動がうかがわれる。その中でも事例2、3では、下位の者が上位の者から名前をもらうために贈り物をするという行動がみられる。このような贈与交換を伴う儀礼が古代の日本海沿岸の地域で行なわれていた事の完全な実証は難しい。しかし、日本海沿岸で発掘された遺跡とそこから出土した遺物は、古代において、贈与交換を有する習慣や儀礼が存在していた可能性を見出す手掛かりを提供している。1980年に発掘調査された

石川県金沢市の新保本町チカモリ遺跡や、その直後に調査された同県鳳珠郡能登町の真脇遺跡では、直径90センチもの大木を縦割りにした柱材を径6メートルほどの円形に配した遺構が発見された。また、真脇遺跡では、追い込み漁によって捕獲したとみられる一千頭を越すクジラ、イルカの骨が出土し、木製のトーテムポール状の遺物も出土している³²⁾。真脇や周辺の九十九（つくも）湾では、昭和初期までイルカの追い込み漁が行なわれていた³³⁾。若狭湾に面した福井県三方上中郡若狭町の鳥浜貝塚でも、縄文期の層からクジラ、イルカの骨が出土し、江戸期にはイルカ漁が盛んに行なわれていた³⁴⁾。チカモリや真脇遺跡の巨大木柱列を立てるためには、多くの村人の協力が必要だったとされる。真脇でのイルカ漁の場合も、漁の時期には近隣の集落からも人々が集まり、共同作業に従事していたとみられている。イルカ漁は、集団による協業体制でもって初めて成しとげられるものだからである³⁵⁾。小山修三氏は、集団による協同作業は、大量にとれるが収穫期間がごく短い特徴を持つ主食と関連していると考えた。小山氏によると、収穫後、急速に処理し、保存する事が必要な主食の場合、共同作業が最も効果的なので、集落のリーダーは、特定の時期にどれだけ多くの人が集められるかの能力が問われ、リーダー間に激しい競争が生じる。そして、その競争に打ち勝つのが財の蓄積であり、人々を引き寄せる装置の大きさであり、行事の華々しさであったという。また、アメリカ北西部やオセアニアのように集団を統率するリーダーに財や女が集中し、階層化している社会には、人が集中して儀礼を行い、共食して、偏った富を一挙に社会へ還元するシステムがあり、一般的にはこれを再分配と呼んでいる。この事から、小山氏はチカモリや真脇の巨大木柱列を造った社会は、少集団ではなく、再分配経済という大きなエネルギーを持つ社会であったと考えた³⁶⁾。こうした点から考えてみると、真脇周辺や若狭湾でのイルカ漁を行なっていた人々もまた、再分配経済にもとづいて、多数の人々を一時的に集中させる事のできた社会構造を持っていたのではないかと推測できる。この他、海からの来訪者に対する信仰も再分配経済を支えるもう一つの要素として考えられる。サメやクジラ、イルカは、彼らが追ってくる魚を漁師が喜ぶため、海から訪れる神だと考えられている所が多い³⁷⁾。多くの社会には、来訪者を受け入れ歓待する仕組みがある。来訪者は、強い霊威を持っており、祝福と呪咀のどちらにも無しうる。そのため、来訪者を歓待する側の責任者は、集団内での威信や名声を高めることができるとされている³⁸⁾。これらの事から、吉井氏も指摘しているように、気比大神の本来の姿は、魚群を湾に追い込む習性を持つイルカを原体とする神であったとも推察できる³⁹⁾。イルカ漁が敦賀湾において行なわれていた事については、今のところ不明であるが、敦賀湾が若狭と能登の間に位置しているので、これらの地域の社会や文化が少なからず影響していると見られる。若狭には福井県三方郡美浜町菅浜の須可麻（すかま）神社や大飯郡おおい町父子（ちちし）の静志神社等、アメノヒボコ系の神社がある⁴⁰⁾。一方、能登には石川県七尾市中島町の久麻加夫都阿良加志比古（くまかぶとあらかしひこ）神

社などのツヌガアラシト系の神社が所在している⁴¹⁾。これをみると、若狭と能登の両方に朝鮮半島系の渡来者が関係しており、両者ともイルカ漁の行なわれていた地域に近い事が分かる。こうした事から、朝鮮系渡来者との関係も含めて、両者の間で交流があったと推察できる。漁業や航海との関係が深い所からみて、気比大神は本来、海からの来訪神と強い結びつきを持っていたと考えられる。日本海沿岸に点在する遺跡群と関連付けて考えてみると、敦賀湾周辺を含む古代の北陸地方では、首長が贈与交換を行い、富を再分配する事で、人々が集中して、首長が高い地位や威信を得る習俗が存在したであろうと推定される。

5 「名易え」説話との比較

伝承が、祭式から発生したという点でみるならば、「名易え」説話は、古代の北陸地方で行なわれていた通過儀礼に際して、儀礼の主催者が自らの地位や威信を高めるために行なった贈与交換が説話として説明されたものであると考えられる。そこで行なわれた儀礼において、首長を中心とした再分配経済が機能しており、贈与交換がオセアニアでの豚祭りやポロロリ、北西アメリカでのポトラッチと同様か、それに近い形式で行なわれていたであろうことが考えられる。しかし、贈与と「名易え」をめぐって、オセアニアや北西アメリカの先住民族の間では、成人儀礼において、男子は上位の者から社会的権威のある名前をもらう。そして、名前をもらった男子はそのお礼として、食料や財を贈るという形になっている。これに対して、『古事記』の太子と気比大神との「名易え」説話では、気比大神は、タケノウチノスクネに太子の「名易え」を申し出、その願いは認められている。これに対して、気比大神は、「名易え」を認めてくれたお礼として、太子に食料の魚を贈った、と語られている。

第3章において、気比大神は、太子の祖先神であるという今井氏以来の説にもとづき、民俗事例における成年式のあり方と、上代では母親が子どもの名を決めていたらしい事から考えて、「名易え」とは母親によって命名された太子が、母方の祖先神が持つ秘密の名を継承した事であると論じた。この第3章をふまえると、この事は、先祖である気比大神が、子孫である太子の成人儀礼に際して名前を与えたという事である。これは、太子の側からすれば、先祖の魂を継承した事を意味する。それと同時に、共同体からお祝いの品を太子に対して贈った事でもある。さらにまた、太子は、天皇となるべき存在であるから、名前や品物の贈与は、支配と従属の関係に置き換えられる。

ところが、ポトラッチ等の場合は自然な共同体社会における上位者から下位者への名前の贈与と、下位者から上位者へのお礼である。これに対して、『古事記』の「名易え」説話の場合は、太子は天皇となるべき存在であるから、その社会的条件はポトラッチ等の場合とは同一ではない。名前を与える者が、同時にお祝いするという形になっているからである。太子は天皇となるべき存在であるから、単純

な贈与交換は成り立たない。これは、一種の服従儀礼である。下から上に名前を贈り、同時に祝福として祝いの品を贈る事は、『古事記』のヤマトタケルの物語で、クマソタケルが自分より上位のオウスノミコトにヤマトタケルという名前を献上した事と同じ服従儀礼である。同時に、王に名前や贈り物を献上する事が、王の靈魂の強化を意味していたと考えられるからである。

6 まとめ

本論文は、これまでの研究成果をふまえ、名前の民俗や交換儀礼等との比較によって、「名易え」説話の、『古事記』中でのあり方及び、その原形についての考察を試みた。太子と気比大神との「名易え」は、太子の成人儀礼の一環として、祖神から新たな名を授かり、それによって自らの靈性を高めて、第二の誕生を成し遂げた事を示している。ところが、太子は天皇になるべき存在であるから「名易え」太子の靈性の強化を意味しており、それは服属儀礼の性格も持っていたからだと考えられる。漁業や航海との関係から、気比大神は本来、海からの来訪神と強い結びつきを持っていたと考えられる。さらに、日本海沿岸に点在する遺跡との関連から、漁業を中心とし、共同作業を必要としていた古代の北陸地方では、人々を集中させ、富を再分配する事で、首長が高い地位や威信を得る贈与交換が行なわれていたであろうと推定される。このように『記紀』の「名易え」説話は、成年式に行なわれていたであろう贈与交換が、皇太子時代の応神の成人儀礼と結び付けられて成立したものと考えられる。

注

1) 「易」には、「かえる」、「あらためる」、「いれかわる」の意味を持ち、「易名」といった場合には、「名

をかえる」の他に「死後に諡（死者の実名を避けるために用いる名）を賜る」という意味も持つ

。

2) 『本居宣長全集第十一巻 古事記伝』 1969年3月 筑摩書房

3) 竹野長次『古事記の民俗学的研究』 1960年4月 文雅堂書店

4) 吉井 巖「応神天皇の周辺」（『天皇の系譜と神話一』 1967年11月 塙書房）

5) 吉井 巖「応神天皇の誕生について（一）」（「帝塚山学院大学研究論集」第十一集 1976年12

月、『天皇の系譜と神話三』 1992年10月 塙書房）

『日本書紀』によると、継体の父は湖西に別宅を持ち、父の死後は母とともに越前の地で暮らし

、

九頭竜川の河口の三国で大和からの使者を迎えている。

6) 三品彰英「古代宗儀の歴史的パースペクティヴ—天の日矛の後裔たち—」（1970年5月、『三品

彰英論文集 第四巻 増補 日鮮神話伝説の研究』 1972年4月 平凡社）

ミケは「御食」、ケヒは「食霊」の意であるから、太子は、本来は穀霊を意味する幼名を持っていた

と三品氏はいう。

アメノヒボコと神功皇后との関連について、『記紀』に記すアメノヒボコの遍歴した新羅→伊都→長

門→播磨→難波→近江→敦賀の道順が、太子誕生から敦賀への道順と一致している点も重要である。

7) 塚口義信「『日本書紀』応神天皇即位前紀の「一云」について」（「古代文化」第23巻第11号

1971年11月、『神功皇后伝説の研究』1980年5月 創元社）

日本各地で行なわれている伝統行事や、オーストラリア先住民、北米インディアンの成人儀礼で

は、男子が成人社会に加入する際に名を改める事例がしばしば見られる。

オキナガタラシヒメ（神功皇后）は息長氏出身といわれている。息長氏の本拠地は、近江の坂田

郡にあり、古代の陸上交通の要地であった。そして、交通の要地であった敦賀と坂田郡とは南北

でつながっており、若狭地方の海産物は坂田郡経由で中央に運ばれていたと考えられる。この

事から、塚口氏は息長氏の勢力は角鹿にも及んでいたであろうと推論した。

8) 倉塚暉子「胎中天皇の神話」（『文学』五十巻二・三・四号 1982年 岩波書店、『古代の女』

1986年6月、平凡社）

9) 阪下圭八 「魚と名を易えた話」（『月刊百科』275号 1985年 平凡社）阪下圭八 「起源・命名・

神話」(『週刊朝日百科 日本の歴史』49号 1987年3月 朝日新聞社)

- 10) 尾崎和光 「気比大神の名易の物語」(大田善磨先生古希記念国文学論叢、1988年9月、『古事記考説』 1989年6月 和泉書院)

海人族の信仰、文化は、朝鮮半島との関わりが深く、『垂仁紀』二年条にある大加羅国の王子、

都怒我阿羅斯等や『記紀』のアメノヒボコの説話が残されている。気比の神はアメノヒボコであると

いう説も踏まえて、尾崎氏は、太子が角鹿で「名易え」を行なったのは、神功・応神にとって角鹿

は古い縁のある重要な場所であり、その土地に関係の深い古い伝承があったからであろうと推察した。

- 11) 田村克巳「気多・気比の神—海から来るものの神話—」(『海と列島文化 第一巻 日本海と北国文化』 1990年7月小学館)

- 12) 豊田国夫『名前の禁忌習俗』 1988年10月 講談社学術文庫

- 13) 馬 寅主編、君島久子監訳『概説 中国の少数民族』 1987年12月 三省堂

- 14) B・A・トゥゴルコフ、斎藤晨二訳『トナカイに乗った狩人たち 北方ツングース民族誌』 1981年6

月 刀水書房

- 15) フレイザー、永橋卓介訳『金枝篇』(二) 1951年5月 岩波文庫

- 16) フレイザー、前掲 15)

- 17) 穂積陳重著、穂積重行校訂『忌み名の研究』(原題『実名敬避俗研究』 1926年6月) 1992年3月 講談社学術文庫

滋賀県高島郡高島町鶴川に所在する白鬚神社において、毎年9月(旧暦8月)の5日と6日に

行われる秋の例祭には、「なるこまいり」という神事が行われている。親が数え年2歳なった男女

の幼児を参拝させる際、神主が神前で幼児に特別な「名前」を授ける。幼児の本名に替えて、親が授かったその「名前」で3日間幼児を呼ぶと幼児が健康に育つとされている。この神事にみら

れる、神から授かった名前を一定の期間、子供の名前として、子供の親のみが呼ぶという信仰は、神から授けられた「名前」というものを、本人とその親以外の者には秘密にする習慣が下敷きになっているのであろうと推測される。

18) 穂積陳重 前掲 17)

19) 西宮一民「神名の釈義」(新潮日本古典集成『古事記』付録) 1979年6月 新潮社

20) 西宮一民 前掲 19)

21) 今井啓一「気比大神は天日槍命であろう」(『韓来文化の後栄』下 1963年7月、韓国資料研究所 『天日槍』 1966年4月 綜芸社)

氣比大神をアメノヒボコの神格化とみる説については、今井啓一氏によって有力になっている。今井氏は、アメノヒボコが近江から若狭を経て但馬国に至る道順に角鹿があったと考え、また、若狭や越前国には朝鮮系渡来者が多数居住していた事もこの説の根拠とした。

22) 豊田国夫『日本人の言霊思想』 1980年5月 講談社学術文庫

23) A・ファン・ヘネップ、綾部恒雄、綾部裕子訳『通過儀礼』 1977年6月 弘文堂

24) 伊藤幹治『贈与交換の人類学』 1995年6月 筑摩書房

D.J.J.Brown 「The Structuring of Poiilopa Feasting and Warfare」 "Man(N.S.)"14(4):712

-733) 1979

25) 吉岡政徳「ビッグマン制・階梯制・首長制」(『オセアニア2 伝統に生きる』 1993年4月 東京大

学出版会)

26) エリザベス・バレン、斎藤雅子訳「クワキユートル族」(『世界の民族18 北アメリカ』 1978年12月

平凡社)

27) 伊藤幹治 前掲 24)

28) Franz Boas / edited by Helen Codere "Kwakiutl ethnography" 1966 University of Chicago

Press

中川 敏『交換の民族誌』1992年6月 世界思想社

29) 岡田宏明『北の文化誌』 1994年10月 アカデミア出版会

30) 伊藤幹治 前掲 24)

31) 岡田宏明 前掲 29)

32) 藤田富士夫「日本海文化の国際性－日本海沿岸」(中公文庫版 『日本の古代3 海をこえての交流』 1995年11月 中央公論社

33) 秋道智彌『クジラとヒトの民族誌』 1994年9月 東京大学出版会

34) 秋道智彌 前掲 33)

35) 平口哲夫「石川県真脇遺跡」(『季刊 考古学』第15号1988年5月 雄山閣出版)

36) 小山修三「リーダーと経済システム」(『週刊朝日百科 日本の歴史』37 1986年12月 朝日新聞社)

37) 谷川健一『古代海人の世界』 1995年12月 小学館

38) 小山修三 前掲 36)

39) 吉井 巖 前掲 5)

40) 今井啓一 前掲 21)

41) 白崎昭一郎「男大迹＝進出の背景」（『東アジアの古代文化』1974年秋号 1974年10月 大和書房）

○『古事記』仲哀天皇段の「名易え」説話

著者:前川治

研究対象：上代文学（古代）

使用言語：日本語

初出:『花園大学国文学論究』第25号 1997年12月 花園大学国文学会

2010年9月15日 初版発行

On "Name-Changing Tale" of Emperor Chuai in Kojiki

author:Maekawa Osamu

subject:ancient Japanese literature(ancient tale)

language:Japanese

First published:2010

A part of this thesis is a retouch and a content in the one of 'Hanazono Daigaku(University) okubungaku(Japanese literature) ronkyu' vol.25 publishing that introduced modifications.

●●当論文の配布について●●

この論文「『古事記』仲哀天皇段の「名易え」説話」は雑誌掲載されたものに一部修正を加えた内容であり、幅広い閲覧の機会を提供するために、電子出版「パプー」にて公開いたします。

学術的な伝承文化の研究に関する学術論文は、学術上の立場から無償公開すべきものであることから、当論文の全文を無償公開とします。

伝承文化の研究を行い、著作物を発行することは、研究成果の発信であり、伝承文化というものに対する人々への紹介活動でもあります。多くの人々の心に豊かな「栄養」を提供することが、研究者としての使命であると考えています。つきましては、今後の調査・研究活動を持続発展していくための、金銭面でのご援助ならびに情報面でのご提供を受け付けています。どうぞご理解のほどをよろしくお願いいたします。

ご連絡はTo-beホームページ内のメールページからお願いします。

『To-be伝承民間文化研究』 <http://www/oct.zaq.ne.jp/tobe-r/>